

YCUREUNIONSDGs 2月8日セミナー

永延 幹男 氏(自然哲学)

「南極から ちきゅうを 観る ～探験(たんげん)の海図から～」

このセミナーは(1)(2)(3)次の順に進められました。

(1) なに、南極とは？ (2) いま、南極は？ (3) では、どうする？⇒ 自然哲学

参加者の大きな関心は、南極から生態学的に「ちきゅう」を観たとき、今どきのようになっているのかにあったと思います。一方講師は、今のちきゅうは危機に瀕していることを世界の南極の科学的調査から明らかにし、それでは私たちはどうする？という段階での議論を期待されていました。参加者はそれを柔軟にキャッチし、また講師も議論を巧みにリードされ、ハイレベルなディスカッションとなりました。

(1) 「なに、南極とは？」：地球誕生の歴史、大陸移動中の1億年前は暖かかった、7千万年前恐竜もいた、5千万年前は木が生えていた、1,200万年位前から現在の状態、南極大陸の氷の厚さは最大4,000mの厚さ、1911年～初の南極探検に行った人びとの紹介

(2) 「いま、南極は？」：南極で進む急激な温暖化(2020年には20°C超!)南極半島方面が顕著、海氷が融ける、棚氷も融ける、底水層(低水温)の温暖化・低塩分化による海洋大循環(1,500年で地球を一巡)の異変、世界の気候変動へ、オゾンホールによる偏西風帯の南下、オゾン層破壊とオキアミ激減との関連性(永延氏が発見)、オキアミ減少により豊穡な生態系に危機、気候変動による地球の地軸4mのズレ、CO₂/メタン層が温暖化の時限爆弾になるのでは、など南極は「終末の氷河」の危機に直面していると、91枚のスライド(世界の科学者たちの調査報告を引用)を用いて南極から観えるちきゅうについて語っていただきました。

(3) 「では、どうする？」：永延さんは「ちきゅうは盆栽である」との概念を持ち、「可能性の探験(たんげん)へ」と自然哲学の道に進まれています。永延さんはKJ法を発明した川喜田二郎氏の愛弟子でいらっしゃるのです、今もKJ法を用いて物事を深く探求されています。質問者の「深層水を使って温暖化を防ぐことはできないか」に対して、永延さんは海洋開発がまさに必要で、栄養塩類を多く含んでいる深層水の活用は重要だ。ただし深層でなくても、もっと浅い表層の水温が急激に変化する水温・密度躍層を上下にかき混ぜる工夫をすれば、陸上でいう畑がよく耕された状態となり、光合成作用が活性化し、海の生産力が高まり、地球環境の改善に繋がるだろう。その説明の中にもKJ法を用いて突き詰めると「自然循環」に行きついたとのお話。自然循環を起こせばいいのだが、高度で

複雑な媒介物を作ることで競争・利潤を上げざるを得ない社会構造とは異なった、仕組みや文明が必要となるかもしれない。

「では、どうする？」となる。そこからちきゅう盆栽論が生まれている。「庭先の盆栽」は捨象して、「本質的なヒトと自然環境生態系との相互浸透を、有限の場と超然意（美）との連関性で哲学する」姿勢。西洋科学も、東洋哲学も両方が必要でその間に「かずら橋」をかけることによってちきゅうの危機を掬う（救う）ことが出来るのではないか、ということで現在本を執筆中とのこと。楽しみです！！

そもそも、永延さんと最初にお会いしたのが進交会館でした。NPO 法人子ども大学よこはまさんの授業で会議室をご利用いただき、終了後にご挨拶がてら「自然哲学とは？」と質問させていただいたのがきっかけでした。子ども大学よこはまさんには深く感謝しております。永延さんも、子どもの感性の鋭さや素直な表現に直に触れられ、改めて「では、どうするか!」、さらに深く広く考えるようになられた模様です。

〈表層の水温躍層について〉

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B4%E6%B8%A9%E8%BA%8D%E5%B1%A4>

〈KJ 法について〉

<https://ja.wikipedia.org/wiki/KJ%E6%B3%95>

書ききれませんので、HP より、是非とも動画をご覧ください。

<http://www.shinkokai-web.jp/pages/36/>

【寄せられた感想・コメント】

●今日はありがとうございました。私は第 55 次南極観測隊として越冬生活の中で、温暖化を調べれば調べるほど、便利さを手放せない(と思っていた)人間活動の乖離と虚しさを感じて、研究者の道を進むことを諦めました。その後民間の環境コンサルタントとして ODA 等の途上国の開発事業に関わっておりますが、国際社会の気候正義の西洋思想と東洋哲学とのギャップを感じておりました。その間を埋める探検学派を知ることができ、どういう考えが良いのかのキッカケを得られました。ありがとうございました。

※これをチャットに書かれた方は時間不足で退出されましたが、永延さんのお話を聞いてありますので。これをご覧になりましたら、ycureunion@gmail.com まで送信をお願いいたします。

●今月中学生に SDG s の学習会をします。そこで彼らがどう進めればいいのかのキーワードが頂けて良かったです。

●今日はハイレベルなお話を企画していただきありがとうございました。出先でスマホです。10時まで聞かせていただきました。永延先生の著書も読んでみたいと思います。

●まだ、会社におりまして、途中ですが中座いたします。とても興味深く拝聴できました。

ありがとうございました。

●講師 永延 幹男 博士の面白く、型破りの講義を時間をわすれて拝聴させていただきました。有難うございました。

タイトルのとおり、壮大な視点から微小な生物の世界まで、探検させていただきました。地球の歴史から説かれ、南極を支点に地球は生きているんだと実感、動物・植物すべてがつながっていることが、わかりました。 なんだか、南極がずっと身近に感じられるようになりました。

昨日、TVのBSアーカイブズで、たまたま南極の冒険家上村直巳を観たところです。 冒険家～探検家～科学的調査研究者～未来予想 と 人間の興味・探求心は続くこともわかりました。 私事ながら、生き物好きの末孫娘（いま高3，17歳）がこの春、獣医学部へ入学することとなりました。 動物愛護・畜産・研究いずれか 夢をもって学んでほしいと思っています。

自然哲学のことも、どんなものか、とても興味がわきました。 先生の関心が、単に自然科学にとどまらず、宗教・哲学・詩（発句・俳句）に及ぶことも驚きでした。

※俳句や短歌はKJ法に役立つそうで、永延さんは一日一句を目標に作られている、特に海外での作が多いので季語は無し。発句の精神でKJ法の表札を作るそう。表札づくりにおいて、その意味は何かを感じ取ったうえで情念と言語の表現とするそうです。

数千句のうち覚えているのは2-3個で、南極で作った俳句：

「氷裂け 我星の果て 鳥の舞」

●おはなしおじさんのつぶやき👉

○永延先生を初めとした科学者は各種データに基づき、気候変動危機を明確に捉え発信されてます。

○永延先生の「こども大学よこはま」は素晴らしく、「子ども大学」を全国展開すべきでしょう。

○グレタ・トゥンベリは科学者の声に耳を傾けろ！…と世界中に発信し、若者たちは動き始めてます。

○私たちにできることは評論、批判でなく、CO2を垂れ流してきた一人として、「罪滅ぼし」をする行動（プラゴミ拾いや伝承行動…）しかないでしょう。

○地球人に求められる行動変容…「意識海図大航海…」、川喜田二郎先生を始めとした、思想哲学への回帰云々

○ともあれ、市大同窓会のSDGsは画期的で評価してます。

【講師 永延さんからの返信】

TO：御感想提供の各位様

FROM：永延 幹男（NAGANOBU Mikio） / 220209

（１）みなさま、ご感想、誠にありがとうございます。事前アンケートを含めて、ありがたく拝読、とても参考になります。

（２）講演後の対話は、みなさまの貴重なご意見とのやりとり、とても勉強になります。私の話の根幹には日本の古代の偉人、道元禅師はじめ、最澄、空海に学び、深く影響しています。偶然ながら、こうした皆様との御縁を活かして、対話が深まったことに、文字通り有り難く存じます。

（３）私の講演の内容は、「ああ勉強になりました」では済みません、まさに、ちきゅう文明史レベルへ繋がっています。横浜という古来より世界へ開いている港町として、みなさまと共に探験(たんげん)していこうと、本講演を通じてあらためて思いました。

以上、返礼まで。

【講師プロフィール】

1951年福岡県旧八女郡生まれ。福岡県立八女高校卒業。東京水産大学（現東京海洋大学）卒業。東京大学大学院農学系研究科博士課程修了・農学博士（南極海洋環境生態学）。大学時代に地球一周を含む多くのちきゅう探検旅行を経て、南極海・南大洋の環境生態学者へ。（独）水産総合研究センター国際水産資源研究所南大洋生物資源研究室長、国際条約の南極海洋生物資源保存条約科学委員会（CCAMLR）の日本科学者代表・副議長等を歴任。南極海全体にわたる国際共同調査研究を含む総計九回の最前線調査・総括。現在、ちきゅう南極をフィールドとして、緊迫の地球環境生態変動に関して、客観性科学と主観性哲学との相互思考による「自然哲学（Natural Philosophy）」を探求、「(仮)探験(検)の海図」を執筆中。

・主著書：「国際・学際挑む―自然研究に用いた累積KJ法の効果（KJ法実践叢書）（共著1985 プレジデント社）」、「炎の村へ―自己回帰への探験（1986 たま出版）」、「調査船『開洋丸』の見た未確認飛行物体（1988 サイエンス/Scientific American 日本版18(9)(11)日経サイエンス社）」、「南極海―極限の海から（2003 集英社新書）」、「南極海―氷の海の生態系（編著2013 東海大学出版会）」、「融然の探検―フィールドサイエンスの思潮と可能性（編著2016 清水弘文堂書房）」他。

・ちきゅう南極環境生態変動に関する発信サイト：

Facebook：<https://www.facebook.com/mikio.naganobu>